JIRON KOHRON

史上初の「解任された米大統領」秒読みか
トランプ氏vsFBIの仁義なき戦い

国際ジャーナリスト
戸田光太郎

ニクソン辞任の意外な背景

アンドルー・ジョンソン第17代大統領（在任1865～69年）は、弾劾裁判にかけられたが、1票差で免れた。2人目は、第42代のビル・クリントン氏（同1993～2001年）で、下院による訴追で行なわれた上院での弾劾裁判では、有罪評決に必要な3分の2に達せず、辛うじて罷免は免れた。

絶体絶命？のトランプ大統領（ホワイトハウス）

ここで、誰もが第37代大統領のリチャード・ニクソン氏（同1969～74年）を思い出すだろうが、彼は弾劾裁判にかけられる前に辞任した。議会による罷免が確実だったための苦肉の策で、歴史上、自ら大統領の座から降りた唯一の人物となった。

ニクソンを追い詰めて行ったのは、ワシントン・ポスト紙の2人の記者、ボブ・ウッドワード氏とカール・バーンスタイン氏で、新聞で日々報告されたこの経緯は、単行本『大統領の陰謀』となり、さらにハリウッドで映画化された。

取材調査が壁にぶつかるたび、ウッドワード氏にヒントを与える不思議な存在は、ワシントン・ポストの編集部で、「ディープ・スロート」という当時大ヒットしていたポルノ映画の題名を符号として与えられていた。

彼は映画が大ヒットしてもこの情報源を明かさなかった。が、事件から33年経った2005年に、マーク・フェルトという、事件当時FBIの副長官だった人物が、ヴァニティー・フェア誌上で自分がディープ・スローだったと告白した。この時点で、フェルト氏は認知症で記憶の相当部分が欠落してしまっていた。

追ってウッドワード氏も、フェルト氏がディープ・スロートだったと認め、『ディープ・スロート　大統領を葬った男』を上梓した。

ウッドワード氏の記述で多くの事は明らかになった。フェルト氏との出会いは全くの偶然だ。1969年頃、当時国防総省に勤務する海軍大尉だったウッドワード氏は、ホワイトハウスに書類を届けに行き、創設スペースで偶然隣に座っていたのがフェルト氏だった。

ウッドワード氏は一面識もない相手に話しかけ、当時はフーバーFBI長官の監察室長だった、若き日のマーク氏と親しくなった。

一方のフェルト氏は、ウォーターゲート事件の頃にはFBIの副長官になっていたが、彼を引き上げてくれたフーバー長官は死去してしまい、当然長官になるはずだったフェルト氏は副長官に留め置かれた。そしてニクソン大統領は、長年の忠臣であるパトリック・グレイ氏を長官代理に任命した。

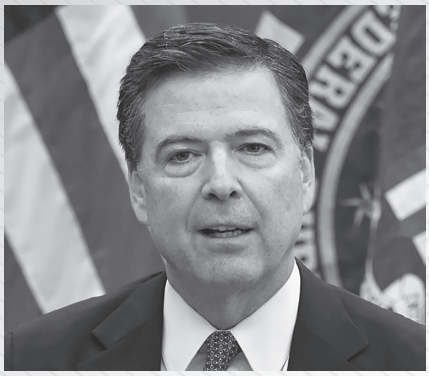
ニクソン氏に対する人事上の恨みが、フェルト氏を「ディープ・スロート」という内部密告者にしたのだろう、と読者は想像する。ウッドワード氏はニクソン氏の大統領辞任後、マーク氏とは会わずにしており、『大統領を葬った男』を書く頃には、マーク氏の認知症はさらに進行して密告の動機は聞けず、2008年には他界してしまった。

33年前に書かれた『大統領の陰謀』と『大統領を葬った男』を続けて読

むと、今回危機的状況にあるドナルド・トランプ氏の周囲でも、いろいろと人間臭い動きがあるのだろうと推察されて来る。

フェルト氏が仕えたフーバー氏はFBIの初代長官で、第29代大統領カルビン・クーリッジ（同1923～29年）から、第37代のニクソン氏まで、8代の米大統領に仕えた。これは米史上最も長く政府機関の長を務めた記録で、やがては大統領以上の権力を有するようになったため、彼以降、FBI長官の任期は最長10年に制限された。

トランプ大統領はFBI長官のジェームズ・コミー氏を突如解任した。理由は、ジョセフ・セッションズ司法長官とロッド・ローゼンシュタイン司法副長官から、コミー長官の解任を勧める書簡を受け取ったからだ、とトランプ氏は説明した。「コミー長官がよい仕事をして来なかったからだ」というのだ。



FBI長官を解任されたコミー氏（FBI）

コミー氏はトランプ陣営のロシア疑惑「ロシア・ゲート」を捜査していた。続くNBCニュースのインタビューで、トランプ氏はコミー氏の下でFBIは混乱して来たと指摘、さらに彼を「目立ちたがり屋」で「スタンドプレー好き」と酷評した。

この発言を受けてマッケイブFBI長官代行は、「トランプ大統領の発言は正しくない。FBIの大多数はコミー氏と良好な関係を享受していたし、長官はFBI内で大きな支持を得ていた」と反論している。

フーバー氏は8人の大統領に仕える内に、政治的な反対者や活動家に対し、FBIを使って秘密ファイルを作り、権力を集中させ、大統領でさえ彼からの報復を恐れて手を出せない存在となっていた。だからこそFBI長官に任期が設けられたのだが、コミー氏は10年を待たずに解任。

元部下達が総出で復讐戦か

さて、コミー氏は人格者で人気者だったという。残されたFBIのメンバーは、長官代行のマッケイブ氏を始め、全力でトランプ氏追い落としの材料を集めるだろう。そしてメディアにリークするのだ。ちょうど、フェルト氏がウッドワード氏に情報提供したように……。

まず、ニューヨーク・タイムズ紙がすっぱ抜いた。トランプ氏はコミー氏に、国家安全保障担当のフリン補佐官とロシアの関係に関するFBIの調査を中止するよう求めたというものだ。

コミー氏はその際の会話を詳細なメモとして残していた。メモにはトランプ氏が、「この調査を終わらせ、フリンを自由にしてくれ。彼はいい奴だ」と語ったというものだ。

同紙が入手したメモによると、トランプ氏はロシアのセルゲイ・ラブロフ外相らと会談した際に、コミー氏を「頭がおかしい」と評し、彼を解任したことで「ロシアに関して受けていた大きな圧力」が取り除かれたと話したという。

一方のコミー氏は、議会の公聴会に応ずると回答した。ただし、条件がある。公聴会は公の場でやりたい、というものだ。本誌発売までには、多くの新事実が明らかになるだろう。

弾劾裁判となれば長丁場となり、最低でも12カ月はかかる。1年後にトランプ氏が罷免されれば、副大統領のマイク・ペンス氏が繰り上げで大統領になる。

かつて、ニクソン氏の辞任で副大統領のジェラルド・フォード氏が大統領になっている。選挙で選ばれなかった大統領が誕生したのだが、彼は大統領としてニクソン氏を特赦したことが祟ってか、来たる大統領選で、民主党のカーター氏との戦いに敗れた。

ちなみに、「ペンス大統領」の出現は、日本にとって追い風かもしれない。彼は副大統領になるまでインディアナ州の知事だった。日本企業の多い州で、彼自身、知事として何度も来日し、トヨタやホンダ、スバル、三菱自動車を訪問している。

彼とタッグを組む麻生太郎副総理は、ペンス氏が来日した際の議事録に目を通して、「あいつは真面目な野郎だよ」と述懐している。万が一、諸般の事情で日米両国のトップが交代した場合、「ペンス大統領と麻生総理」という“日米同盟結束コンビ”が誕生、というシナリオも、絵空事だとは言えないだろう。